2023年6月11日（日）主日朝礼拝説教

『イエスとは誰なのか？』　井上隆晶牧師
使徒4：10～13、ヨハネ5：18～25

❶【父と子は同質であること】
イエス様とは一体誰なのか？人間なのか、神なのか、天使なのか、または第三の被造物なのか？という問いが教会の中に起こりました。それをキリスト論争といいます。今日はヨハネ福音書から、イエス様とは誰なのかをお話しましょう。今日のテキストを見てみましょう。まずユダヤ人がイエス様を殺そうとした理由として「**神を御自分の父と呼んで、ご自身を神と等しい者とされたからである。**」(5：18）とあります。「**神と等しい者**」とは神という事です。単なる人間ならイエス様は迫害されなかったでしょう。ユダヤ教でもイスラム教でもメシアはすべて普通の人間です。キリスト教だけがこの方は神だといいます。それでユダヤ教から分かれたのです。更に19節では「**父がなさることは何でも、子もそのとおりにする。父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。**」とあります。「父」とは神様のことであり、「子」とはイエス様のことです。神様がなされることを何でも、イエス様もなされるということは、万物の創造もするということです。つまりイエス様は全能者であるということです。「全能の父なる神様」と祈る人がいますが、「全能のイエス様」と祈る人はあまりいませんね。でも中近東の教会では天井がドオムになっていてモザイクでキリストの巨大が顔が描かれ「全能者」と書かれています。
20節では「**ご自分のなさることをすべて子に示される**」とあります。神様は行うことをすべてイエス様に伝えるというのです。それを「父と子の永遠の相談」といいます。アレキサンドリアのキュリロスは「父の意志は意志の源泉であり、御子の意志は従順であり、聖霊の意志は実現する事である」といいましたが、父と子の意志が完全に一つであることが分かります。21節以下では、キリストは命の与え主であり、裁きもイエス様に一切委ねられているとあります。23節では「**すべての人が父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。**」とあります。父なる神に対する尊敬・礼拝・栄光と、御子イエスに対する尊敬・礼拝・栄光は同じものでなければなりません。このようにヨハネ福音書はイエス様が父なる神様と同じ性質を持った神であると書いているのが分かります。

●いままでいろんな人がイエス様について言ってきました。統一協会もエホバの証人もキリストは被造物であって神ではなく「神の子」だといいました。二世紀に出て来た「養子論」と同じです。モルモン教は「天使」だといいました。これも創造されたものです。4世紀にアリウスという人が、キリストは半分神で、半分人間だといいました。つまり50%神で、50%人間だというのです。それに対して

アタナシウスという人は、50%神では神ではないし、50%人間では人間でもない、そんなものは化け物だ。完全な神だからこそ私たちを救えるし、完全な人間だからこそ私たちの模範になれるのだといいました。そこで教会が出した答えは、「イエス様は100%の神性と100%の人間性を併せ持っておられる方である」でした。

この方は神性においては父なる神と同じ本質をもち、人間性においては罪を除いては私たちと同じ本質をもっておられます。キリストは神性において悪霊を追い出し、病気を癒し、自然界を従わせます。同時に人間性においてラザロの死を泣き、サマリアの婦人と語り、多くの罪人の友となります。このように聖書の中のイエス様を見る時に、この二つの性質のバランスで見て行くと分かるのです。故に昔の教父たちはいいました。「イエス様を見て真似られる所は真似なさい。真似られないところは礼拝しなさい。」

❷【イエスの名とは】

ところで使徒言行録の中で繰り返しペトロが語っている言葉があります。それは「**イエスの名**」というものです。神殿の門のそばにいた足の不自由な男を癒した話です。「**イエスの名が強くしました。それは、その名を信じる信仰によるものです。**」(使徒3:16)「**この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは…イエス・キリストの名によるものです。**」(使徒4:10)「**私たちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。**」(使徒 4:12) 私は最初、この意味が分かりませんでした。「イエスの名」自体に力があり、名前を出すと呪文のような効果があるのだろうか、と考えたものです。そうではないのです。弟子たちにイエス様が言われた「**今までは、あなたがたは私の名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。**」(ヨハネ16:24) という言葉と関係しているのです。ユダヤ教の祈りは、詩編と旧約聖書から取られたもので、イエス様の名で祈りませんし、イエス様に向かって祈ることもしません。しかしイエス様は、「**私に願いなさい**」と言われたのです。これは祈りの大改革です。弟子たちはイエス様を神として呼び始めたということなのです。是非、イエス様に頼り、イエス様に向かってその名を呼び、祈って下さい。

❸【クリスチャンも二つの性質をもっている】

私たちクリスチャンも二つの性質を持っているのです。私たちは洗礼によってキリストに結ばれて一体となり、キリストの肢体となりました。聖霊を受けた私たちも油注がれた者(キリスト)です。イエス様の場合は、御父が聖霊という油を限りなく注がれます(ヨハネ3:34)から、聖霊がとぎれることはありませんが、私たちの場合は、聖霊が満ちる時と、とぎれる時があるのです。私たちの生き方が神に向いている時、聖霊は私たちの中に満ち、私たちの肉体は神の道具になり、キリストと同じ業をすることができます。キリストのように語り、病を癒し、悪

霊を追い出すのです。しかし、神の道具になっていない時は、自分の欲望の道具になっています。そちらの方が多いのです。私の中には、二人の人がいることになります。一人は肉の人で、もう一人は神的な人です。一方はこの世に属していますが、もう一方は天に属しています。この二人が交互に現れるのです。さっきまで大胆に神を語り、賛美をしていた人が、晩御飯を食べる時はただの人に戻ります。人間の意志と、神の意志が「螺旋状」に絡み合い、ついたり離れたりします。生涯これを繰り返すのです。それでもいいのです。なぜなら私の中に住んでおられる神の方が大きいからです。

❹【神の道具になる幸せ】

●北大阪教会の前任の北尾牧師は、その日の朝、礼拝説教をして、終わった後、疲れたと言ってソファーに腰掛けて休んでいました。家族が食事の用意が出来たと言ってお越しに行ったら、亡くなっていたというのです。眠るように死ぬなんて、しかも最後の最後まで、神様の道具として用いられて召されるなんて、理想的な死に方だと思います。私も死ぬ時はそのような死に方をしたいと思い、祈っています。平方牧師は高齢者施設に入っておられますが、訪問すると、必ずといってよいほど、テーブルについて聖書を写経しているか、説教を書き直しているか、何かの信仰書を読んでおられます。突然やってきてもいつもそうなのです。これはなかなか出来るものではありません。体全体が常に神に向いているという事です。あるお坊さんは中風になって言葉がしゃべれなくなりましたが、お経だけは喋れるというのです。体に染みついているという事でしょう。

「神が共にいる人生、神に用いてもらえる人生」ほど幸せなものはないと思います。精神科医の神谷美恵子女史は「**年寄りから生きがいをとりあげることほど残酷なことはない**」と言っていますが、歳を取って何もすることがなく、誰の役にも立たないということは悲しい事です。でもクリスチャンには祈るという仕事があります。それは最後までできる神様へのお務めです。

詩編 115：1 に「**わたしたちではなく、主よ、わたしたちではなく、あなたの御名こそ、栄え輝きますように。**」という祈りがあります。信仰とはこの一言だといっても良いと思います。「**私は御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡を行ったではありませんか**」（マタイ 7：22）という人がイエス様から「**知らない**」と言われたように、自分の栄光を求める人が多い中で、神の栄光を讃えるのが本当の信仰なのです。主の祈りの最初の祈りも「神の御名が崇められますように」です。私の神学校の時のＩ先生もいつも「**栄光はいつもキリストにありますように。恥は私にありますように。**」とおっしゃっていました。人生の最後に、神様の大きな恵みが見える人がほんとうの幸せな人なのです。人生のすべてを失っても、決して失われないものがあります。それこそ神キリストの愛です。キリストは唯一、あなたを裏切らない方です。これからも主の道具として用いられましょう。